ジャカルタ日本人学校における異文化理解教育

前日本国大使館附属ジャカルタ日本人学校　教諭
神奈川県川崎市立平中学校　教諭　坂　田　智　恵

キーワード：在外教育施設、ジャカルタ、異文化理解

１．はじめに

縁あって在外教育施設で教鞭をとる機会をいただいた。派遣される前から異文化理解を研究する学習会に参加しており、「異文化理解・国際理解」は興味深いテーマであった。現地で３年間過ごす中で、自分なりに「異文化理解とは何か」ということについて考えた。力が及ばなかった所が多々あったと思うが、その実践の一部を紹介したい。

２．インドネシアとジャカルタ日本人学校の環境

ジャカルタ日本人学校には小学部と中学部があり、児童生徒1200以上が在籍する大規模校である。日本からの児童生徒だけでなく、インドネシア人を父や母に持つ児童生徒も多数在籍している。日本人家庭では運転手やメイドを雇うことが通例となっており、学校や家庭でインドネシアの言葉や習慣に触れる機会が比較的多い環境にあったと言える。

インドネシアは世界最大のイスラム教徒を抱える国であり、宗教上行わなければならない、または行ってはいけない事がいくつかある。例えば１日５回のお祈りである。特に金曜日のお昼のお祈りは最も大切なこととされており、児童生徒も「金曜日のお昼は静かにしていないといけない」「お祈りが終わるまでは用があっても待つ」など、現地で生活する中で自然とその習慣を受け入れていたように感じた。

また断食月に入ると、水分を取らなかったり、お昼ご飯を食べない児童生徒もいるのだが、彼らを特別視することなく自然に過ごしていた。

異文化理解のキーワードの１つに「自分と異なる考えや行動をする人に対してどのように接するか」という事があげられるが、ジャカルタ日本人学校は違いを受け入れ、共生していく事を理解しやすい土壌があったと言える。

３．ジャカルタ日本人学校での異文化理解・国際理解教育

ジャカルタ日本人学校が行っている国際理解教育は３つに大きく分けられる。

(1) インドネシア語教育

小学部３年生から中学部３年生まで、年間35回を目標にインドネシア語教育を行っている。小学部１年生と２年生は、現地理解教育の一部としてインドネシア語教育が行われている。先に書いたように、運転手やメイドとコミュニケーションを取る必要があるので、自分の生活に関わる基本的なインドネシア語を話す事ができる児童生徒は多いが、決してメジャーな言語ではないため、それ以上の表現力をつけようとする気持ちはあまり高くなかった。一方、インドネシア家庭の児童生徒の中には、ネイティブ並に話す事ができる人も多く、クラス編成や各クラスの人数配分など課題が多く残ってしまった。

(2) 現地理解教育

インドネシア理解を目的として校外学習を行う他、各学年とも年１回程度、インドネシアン・ヘリテイジ・ソサイエティを招き、インドネシア理解の為のレクチャーを受けている。事前にヘリテイジのスタッフと打ち合わ

せを行い、総合的な学習や生活科で学習する内容に合わせたテーマを設定する。平成26年度は、中学部1年はインドネシアの伝統的な影絵芝居である「ワヤン」について、2年生は修学旅行で行くバリ島の歴史と文化について、3年はインドネシアと日本の関わりについて講演をしていただいた。

(3) 現地校交流

各学年とも毎年1~2回、現地校を訪問したり招いたりして交流活動を行う。活動内容は成長段階で異なるが、小学部では現地の生徒と一緒に活動することが多く、中学部では一緒に活動をするだけでなくお互いに何かを教え合うという活動が加わる。相手校は特に決まっておらず、年度の初めに学校のインドネシア語のスタッフと話し合って決めていた。

また中学部には「日イスクール」という行事があり、5~6校の現地校生徒150人程度を日本人学校に招き、グループに分かれて少人数で様々な活動を行った後、それぞれの学校が出し物を披露するという事が行われていた。

4．平成26年度、中学部3年生の現地校交流の様子

中学部3年生はパラマルタ校と2回にわたり現地校交流を行った。パラマルタ校は近隣にある私立の学校で異文化理解に力を入れている。選択による日本語の授業も行われており多少日本語を理解する生徒もいる。日本の文化に大変興味を持った生徒が多く積極的に交流を行うことが出来た。

(1) 1回目：フォトスカベンジャーハント

ジャカルタ日本人学校にパラマルタ校の生徒を招いて5月に行われた。校内を巡り、制限時間内に「ターゲットリスト」にあるお題の写真を撮ってくる活動である。グループ内でコミュニケーションをとらなければ撮影できない「トリック写真」などもターゲットリストに含まれており、どのグループも英語やインドネシア語の単語を駆使して活動を行っていた。3年生になって第1回目の交流活動と言うこともあり、最初は表情も硬く何となくぎこちない雰囲気が漂っていた。しかし最終的に撮られた写真には笑顔が溢れており、良い活動ができたと感じている。

フォトスカベンジャーハントで撮影された写真

(2) 2回目：日本語と日本文化を紹介する

ジャカルタ日本人学校の生徒がパラマルタ校を訪問する形で7月に行われた。パラマルタ校の希望で、第1部「日本語と日本文化を教える」、第2部「日本の文化を紹介する」という大枠だけは決めてあったが、テーマや方法についてはジャカルタ日本人学校の生徒に任せた。第1部ではカルタや習字、紙芝居などを使って日本語や日本文化をわかりやすく伝える工夫がされていた。新幹線や体育祭で行われた応援合戦をテーマに選んだグループもあり、どこまで伝わっていたのかは疑問が残るが、一生懸命に伝えようとするジャカルタ日本人学校の生徒と、一生懸命に理解しようとするパラマルタ校の生徒達の姿がとても印象的だった。第2部では全ての生徒がホール

に集まり、ジャカルタ日本人学校の代表生徒が空手の演舞、剣道の基本稽古を披露した。インドネシアにもシラットという武術があり、パラマルタ校の生徒が飛び入りで参加する場面もあった。その後、一緒に紙飛行機を作って飛距離を競ったり、パラマルタ校の先生方の発案で、突然イス取りゲームが始まるなど、終始和やかな雰囲気の中で交流活動が行われた。

パラマルタ校での交流の様子

５．異文化理解について考えたこと

上記以外にも、中学部３年ではインドネシアの国会を訪問してインドネシアの抱える問題について議員に質問をする活動や、日本大使館を訪問して日本とインドネシアがさらに交流を深めるためにはどんな事が出来るのかを考え、プレゼンテーションを行う活動など、様々な異文化理解・国際理解教育が行なわれてきた。しかし、それぞれの活動の規模が大きく、準備に時間がかかる為、イベント的な要素が強くなってしまったことも否めない。

３年間、ジャカルタで生活する中で、異文化理解・国際理解教育にとって大切な要素は継続性ではないかと考えるようになった。異なる価値観や習慣が自分たちの生活の中にあり、それらとどうやって付き合っていくのか、を考え始めることが異文化理解の第１歩なのではないかと。大規模な交流で異文化に対する興味をかき立てることも大切であるが、次の段階として継続的な交流を企画出来なかったことが課題となった。

とはいえ、ジャカルタ日本人学校の生徒が経験してきたことは貴重なものであり、多くのことを吸収していた。これらの経験が生徒達にとって異文化理解・国際理解の入り口になっていることを願っている。